助成番号：303

国際昆虫学会議における発表ならびに家畜吸血害虫に関する研究交流

倉　持　勝　久
畜産環境学科畜産環境学研究室

1．目　　的

第18回国際昆虫学会議出席・発表と家畜吸血害虫に関する研究交流

2．期　　間

1988年7月2日～18日

3．場　　所

ブリティシュ・コロンビア大学（カナダ・バンクーバー），アルバータ大学（カナダ・エドモントン）他

4．内　　容

a）第18回国際昆虫学会議

国際昆虫学会議（International Congress of Entomology）は，4年に1回開催される国際会議で，1980年の第16回会議は日本の京都，第17回はドイツのハンブルグで開催され，今回の第18回会議はカナダのバンクーバーにあるブリティシュ・コロンビア大学（UBC）を会場として行なわれた。私にとって海外に出るのは生まれて初めてのことであり，またどうせ行くのならツアー等に頼らず1人でいきたいと思い，不安と期待に満ちあふれて7月2日にバンクーバー行のカナディアン航空の飛行機に乗った。バンクーバー空港に到着し，通関を何とか終え会場やホテルに行くにはどうしたらよいものかと不安に満ちてロビーをうろうろしていたら，昆虫学会議のインフォメーションデスクがあり，いろいろたずねてなんとかホテルに落ち着くことができた。

7月3日にOpening Ceremonyが開催され，開会宣言のあとカナダ・オタワ大学のS. S. Tobe教授による記念講演で実質的な会議の幕は切って落された。教授は吸血性昆虫の中でも世界的に人畜に対する被害が甚大であるツェツェバエの研究を一貫して行ってきた人物であり，同じ吸血性昆虫を研究している自分にとっては，文献で交流している中で様々な御教示をいただいた方である。英語のhearingには全く自信が無い自分は，Abstractを手にしっかり握り締め，緊張して講演を待っていた。講演題目は「昆虫の変態と生殖における幼若ホルモンの役割・今後我々は何をなすべきか？」であり，自分の専門分野と深いかかわりあいのあるものであった。講演においては，教授は一語一

語かみしめるように話していただいたので,私でもある程度理解することができたことに感激した。また，時折音楽等も交じえ，講演が単調にならないように十分工夫されていた。教授の講演の中で特に印象に残ったのは「幼若ホルモンは，昆虫の発育と変態および生殖に関して様々な役割を担っており，近年この分野に関する研究は飛躍的に発展してきた。とくにバイテク技術や，分析技術の発展にともない，研究内容も多岐に渡ってきている。しかしあまりに研究内容が細分化しすぎてしまい，生物としての昆虫を大局的にみることが忘れかけられているのではないだろうか。研究者としては，生物としての昆虫の基礎的な観察等を十分に行なった上で，様々な専門的な研究を進める必要が特に重要であろう。そうしなければ最先端情報や技術だけが独り歩きしてしまう危険性があろう」ということであった。よく日本での応用的研究や最先端技術の研究は世界的にも一流であるが，基礎的研究は三流であるなどと評価されることがあるが，教授の話は我々日本人にとって耳の痛い話でもあった。

シンポジウム・小集会・一般講演は7月4日から8日にかけて行なわれた。セクション数は12あり，講演の数は全部で1,000題を超えていた。参加人数は世界約60か国から約3,000人であり，そのうちの半数近くはアメリカおよび地元のカナダからであった。日本からは約300名の参加があり，参加人数，講演数とも世界で第3番目であった。また次回開催国となった中国からの参加者がかなり多かったのが特徴的であった。自分自身の講演は7月7日であったので，それまでは講演の準備を行なう傍ら，いくつかの会場を巡り様々な講演を聞いて回った。とくにポスター・セッションは発表者と直接話ができ，またたどたどしい英語でも時間を掛ければ十分に理解ができた。特に自分自身の専門と深いかかわりあいのあるポスター・セッションでは，様々なディスカッションを通じて有意義な情報交換の機会を持つことができ，これだけでも来た甲斐があったと感じた。余談になるが，ポスター・セッションの会場の横には必ずビールやワインが置いてあり，皆それらを飲みながら熱心にディスカッションをしていた。私はまだ陽が高いうちからアルコールを口にするなんて，という後ろめたさと戦いながら，しっかりとビールを口にしていた。しかしビールを飲んで多少気が大きくなると，初対面の外人に対しても何の抵抗もなく話し掛けることができ，シャイな私に取っては強い見方になってくれたとあとで感謝した。ディスカッションを通じて，今まで文献での交流しかなかった人達と友人になり，また若手の院生などとも交流ができたことは極めて有意義であった。

自分の講演が近づくに従い，緊張感が高まった。講演を申し込んだ時にはワークショップで講演するはずであったが,直前になってchairmanの都合によりワークショップがキャンセルされ,一般講演に回ったことも一つの要因であった。講演内容は，家畜外部寄生虫の繁殖様式について行なった。与えられた15分を若干オーバーしてしまい,迷惑をかけてしまった。講演が終わり，break timeになってから，10数人の人が私のところに来て講演の内容についての感想や様々な質問が寄せられ，何とか英語が通じたことや，講演内容に関心をもってもらったことに自信を持った。またそれらのディスカッションを通じて，有益なサジェスションや新たな友人を得たことは，かけがえのないものとなった。

講演が終わった翌日にはほっとした気分から，レンタル・サイクルを借り，バンクーバー市内を走り回った。バンクーバー市内の中心部にスタンレー・パークがあり，そこにはサイクリング・ロードが完備されていた。この公園はバンクーバー市民のいこいの場となっており，多くの市民がジョギングや散歩を楽しんでいた。公園内には多くの野生の鳥類・リス・アライグマなどがおり，そ

れらが道端に出て来ても，市民の多くはあたりまえのような顔をしているのが印象的だった。100万都市の中心部にこのような公園があるのが何とも羨ましい限りであった。

7月9日にClosing ceremonyが行なわれ，「性フェロモン・我々はこれらについてどのくらい本当のことを知っているのか？」と題された講演がアメリカのW. L. Roelofs博士によって行なわれたが，あまりに流暢な英語と，もう会議も終わりだという緊張感からの解放により，内容についてはほとんど理解できなかった。長いようで短かった国際会議は間もなく終わろうとしていたが，とにかくなんとか自分だけで講演し，その内容についてもある程度納得いく議論ができ，更に新しい友人ができたことを思うと，参加して本当によかったと改めて感じた次第である。

b）吸血性昆虫の研究交流

カナダのアルバータ大学は，本学とも様々な研究交流が行なわれていることは多くの方が御存じのことと思う。アルバータ大学にはGooding博士という吸血性昆虫の生理学のAuthorityがおり，学会期間中にAppointmentをとったところ，学会終了後はLong vacationをとっているためしばらく大学を不在にするとのことでしたので，研究に関するディスカッションは学会中にすませてしまい，大学を見学することを約束して別れた。本学当研究室の卒業生の1人がレイク・ルイーズにいたので，彼と連絡を取り，一緒にアルバータ大学を訪ねることにした。元来鉄道が好きな私は，バンクーバーからレイク・ルイーズまで夜行列車に乗って行った。レイク・ルイーズで待ちあわせ，彼の車に乗ってカナディアン・ロッキーの雄大な眺めを楽しみながらエドモントンまで行った。エドモントン郊外のキャンプ場でキャンプをして一夜を過ごし，アルバータ大学を訪ねた。

外国の多くの大学の例に漏れず，アルバータ大学の昆虫学は，1つのDivisionを形成しており，畜産害虫の他，養蜂学や森林害虫学の研究室があり，日本の大学に例えれば1つの学科と同じくらいの研究組織がある。私からみれば誠に羨ましい限りであった。研究室の多くのスタッフは，国際会議からまだ帰っていなかったため，詳しい研究交流は多くはできなかった。家畜害虫の観察に適した場所を紹介してもらい，アルバータ大学をあとにした。

エドモントンには国立森林研究所があり，そこに私の大学院時代の大先輩である平塚博士がおられるので訪ねてみた。博士の専門は，樹木の病理学研究であり，植物保護の立場からみると昆虫学とは両輪のような関係にある。様々な有益なお話しをお伺いし，また森林害虫の専門家を紹介して下さるなど大変お世話になった。森林研究所は教育機関ではないが，アルバータ大学はもとより世界中の研究者や大学院生が留学することが可能であり，私が訪ねた時も数人のアルバータ大学の院生が研究しており，博士もphDの審査で大変忙しい思いをしておられると話していた。また研究所は研究者はもとよりいわゆる技官などの配置も合理的に行なわれているのがよくわかった。これらの研究を行なう上での合理性については我々は外国からもっと学ぶ必要があることを痛感した。

森林研究所をあとにして，冬期オリンピックが開催されたカルガリーに向かった。エドモントンからカルガリーにかけてはほとんど平坦な地形であり，この地域はカナダでも有数の酪農地帯である。キャンプをしながらアルバータ大学で紹介していただいた場所で家畜害虫の観察や採集を行ないながらカルガリーに到着した。残念なことにあまり天候には恵まれず，思ったような成果は上がらなかったが，これはもう一度来なさいという神様のお達しによるものだと勝手な解釈をした。

長いようで短かった貴重な15日間の体験を終え，後ろ髪を引かれる思いでカナダをあとにした。このような機会を与えて下さった関係諸兄に記して感謝の意を表します。